

特集

戦国時代香美史伝

【参考資料】土佐史談（土佐史談会）・土佐山田史談（土佐山田史談会）・土佐山田町史（土佐山田教育委員会）・土佐山田の文化財（土佐山田教育委員会）・長宗我部元親と土佐戦国の山城（高知県立歴史民俗資料館）

【関連文献】吾妻鑑・参考土佐軍記・長元物語・土佐物語・清和源氏西内系図・土佐国編年紀事略

※掲載した出来事や年代には文献により諸説あります。

土佐の戦国時代に 香美郡を治めた山田氏とは

かがみのおおりの

1193年、源氏の武将・一条忠頼の家来であった中原秋家が、源頼朝の命を受けて土佐に下り、宗我部郷と深淵郷を治める地頭として着任した。

忠頼の遺児である秋道の後見役だった秋家は、秋道にそれら二つの郷を譲り、自らは楠目城に移って山田氏を名乗った（秋道は香宗我部氏を名乗る）。これが山田氏のはじまりといわれている。

時は流れて1508年。山田氏は、本山城、吉良氏、大平氏らと手を結び、長宗我部兼序（元親の祖父）の討伐に成功する。この戦をきっかけに山田氏はさらに勢力を伸ばし、山田元義の時代には3千貫もの所領を有していたという。

では、山田氏の勢力はどこまで及んでいたのだろうか。

このことを探る手掛かりとして、香美郡に広がる大荘園『大忍庄』の名主に宛てた文書がある。この名主は香北町西川の者で、山田氏は名主に對し、年貢米を免除する通達などを送っている。

また、高照寺（香北町朴ノ木）に千体地蔵を寄進した際に書き残された『墨書』や、大川上美良布神社（香北町美良布）を造営した際の『棟札』にも山田氏の名前が残されている。

山田氏について残されている資料は数少なく、情報も断片的だ。しかし、時の権力者としての痕跡が物部川流域の各地に確かに残されており、楠目城周辺を基盤として、さらに東へと勢力を拡大し、香北から物部にかけてその支配を広げていったことがうかがわれる。



土佐戦国の七守護

さてここでは、土佐戦国の七守護の皆さんをご紹介します。岡豊城の長宗我部氏。安芸城の安芸氏。本山城の本山氏。吉良城の吉良氏。蓮池城の大平氏。姫野々城の津野氏。香宗城の香宗我部氏。そして、楠目城の山田氏である。

あれ？8人いるような…。

そう。七守護の名前が残されている書物には『参考土佐軍記』や『長元物語』があるが、両書の間には食い違いが見られるのだ。『参考土佐軍記』の中では山田氏が七守護の一人として挙げられ、『長元物語』では香宗我部氏の名前が挙げられている。さらには七守護が所有する領地の規模も違ってたりするが、大昔のことということまで致し方ないのかもしれない。

彼らは一時期権勢を振るったものの、最終的には長宗我部氏に屈した、いわば敗者である。敗者の歴史というのは、とかく残りづらいものなのだ。



歴史に興味がある人たちに「何時代の物語が好きですか？」と質問すると、人気の1・2を争う時代といえ、やはり戦国時代が候補の一つに挙がってくるのではないだろうか。

応仁の乱に端を発して、日本全国にさまざまな英雄たちが誕生し、この国に覇をとえようと群雄割拠の時代を駆け抜けていった。織田信長や羽柴秀吉らが活躍し、土佐からは長宗我部元親が四国をほぼ統一して天下を狙う。しかしそんな英雄たちの華々しい物語の影には、敗れていった者たちの隠された歴史がある。

いまから400年以上も昔、土佐の戦国時代のはじめ、一条氏を別格に、七守護と呼ばれる領主たちが覇を競い合う戦乱の時代があった。

その中で香美の地を治めていたのは、七守護の一人とされる山田氏。楠目城を拠点に物部川流域を広く支配し、大きな勢力を誇っていた。

特集『戦国時代香美史伝』は、知られざる山田氏の物語と、県内屈指の山城・楠目城を巡る特別企画。どうぞお楽しみあれ。